慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アラム・ヴァルタニアン著 ラ・メトリーの人間機械論
Sub Title	La Mettrie's L'homme machine, by Aram Vartanian
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.5 (1961. 5) ,p.427(81)- 431(85)
JaLC DOI	10.14991/001.19610501-0081
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610501-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

優位から農地改革前に既に高位の生産力水準に達していた。このような地帯別の特殊性は農地改革後の農民的土地所有段階にもひきつがれる。すなわち農地改革は地主的土地所有の強力な存在（千町歩地主制）の下に農民経営が圧迫されていた東北、新潟地帯において農民経営の自立化を実現することにより、生産力水準の飛躍的高揚をもたらしたが、農地改革前に既に地主的土地所有への抵抗として農民経営の高位生産力を実現していた近畿、西南地帯では農民経営規模の零細性の限界が改革後いち早くあらわれ、生産力はむしろ停滞的な発展に留ってしまっている。と同時に生産力の飛躍的発展のみられた東北、新潟地帯においても農業における機械化の進展と共に、農民経営の限界性があらわれ、生産力のより一層の発展は農民層の分解を通じて、経営規模の拡大＝農業資本の蓄積によって初めて可能となる段階に到達しつつある。ここに全国的に農地改革から農業変革への過程が進行し始めたといいえよう。

このような基本的分析に基いて山田氏は地主的土地所有、特にその極限たる千町歩地主制の分析を行う。千町歩地主制は、数名乃至数十名の事務機構を邸内にもち、その統轄化に数十名の差配＝小作者監督を配置し、小作農千数百戸乃至二千数百戸を隷従せしめている一大経済単位である。

このような地主制の典型としては歴史的由来が最も古く江戸時代の豪族＝鉄師である島根の田部家を筆頭に、幕末期に既に千町歩の規模に達していたもの（山形庄内の本間家、新潟蒲原の市島家）、旧幕期に淵源はもつが、明治期に至って千町歩の規模に達したもの（宮城仙北地帯の斉藤家、秋田仙北郡の池田家）、さらに原始的蓄積の段階において開墾、干拓で成立した後来的農場（北海道の千町歩地主、岡山の藤田農場）の四つの類型があげられる。第一の田部家が尨大な山林原野の占拠に基いて、製鉄業と地主という本格的ユンケル的経営形態をとったのに対し、第二、第三の新潟、東北地帯の地主制は、基本的農業地帯に深く根ざし長年の農業生産の発展段階をへて土地集積を行ったものであり、第四の地主制は開拓その他で新たに創設されたものである。第四の形態が原始蓄積期の国家政策といかに密接な関連をもっていたかは、第二、第三の自生的な大地主制と比較した場合、第四形態における公租、公課の大巾免除という事実で明白であろう。

さてこのような四類型の大土地所有制は島根の田部家を除き、大正中期以後の農民運動の高揚によって夫々再編成され、農地改革において最終的に解体する。とくにこの点で特徴的なのは、国家政策の被護の下に一団地の巨大農場として出発した第四の類型においては、労働力の大規模な結果による本格的経営という形態からして当然大規模の農民斗争を必然化し、これに基いて地主制の再編成が行われるに到る。これとは逆にその対極にあるのが島根の田部家であって、これは農地改革の激動の中でも残存し現在に到っている。

最後に山田氏は現在時点の農民層分解の分析視角を示される。彼は第一に農業生産力の発展に対し、農家の家族家計費がより急速に

増大していることに生産力と零細農耕の矛盾の集中的表現を見出し、租税公課を差引いた農業所得だけで家計費を償いうる耕地面積を計算し、これを中農の上限と規定する。そして農外所得を加算して家計費を償いうるギリギリの線を中農の下限とする。さらに彼は第二に雇傭超過が一農家一人当りとなるところを中農の上限とし、雇傭超過が0となる点を下限とする。このような独特な二重の階層規定に基き、家計費増大に伴い、中農の存在基盤が狭隘化し、貧農層への転落と賃労働者化の傾向が広範にあらわれると指摘する。

以上のような日本農業の歴史的総括が、極めて重厚な実証によって裏づけられていることは、本書の最大の強みである。とくに分析視角の明確化の上に、農業生産力が土地所有形態の変化と共にどのように変化し、どのような矛盾に突き当ってきたのかという基本的な問題意識が、豊富な資料分析の内に貫ぬかれている点が注目される。

但し本書の中心的分析視角たる土地所有の発展段階と地帯別の特殊性が、明治以来の資本主義経済の発展、とくに農業部門に対応する国内市場との関連、諸産業部門との関連において商品生産としての農業という視点からも究明される必要があるが、この点は最後の補論で若干説明されているに過ぎない。（岩波書店・A5・四二七頁・一一〇〇円）

アラム・ヴァルタニアン著『ラ・メトリーの人間機械論』

（Aram Vartanian; La Mettrie's L'homme Machine; A Study in the Origins of an Idea, 1960, Princeton Univ. Press. pp. 264.）

野地洋行

一

およそ人類の歴史の上で、十八世紀啓蒙期のフランスほど多彩に思想的人材を生み出したことはかつてなかったのではなかろうか。それはやがて開かれる資本主義社会への夢と可能性を一杯にはらんでいるもののごとくである。だが、しばしば〝百花撩乱〟といった風に形容される十八世紀啓蒙思想家たちは、かえってその多彩さのゆえに〝啓蒙思想家〟としてあまりにも一括され、かつ不当にその個性を埋没させられてしまう傾向があるように思われる。もちろん、ラスキなども指摘するように啓蒙思想家たちを、重農学派（経済学）、百科全書派のいわゆる啓蒙哲学者（哲学）、および社会主義者の三つのグループに分けて考えることができる。しかもたとえば、その一つである唯物論哲学に関しても、その代表者であるディドロ、ドルバック、エルヴェティウス、そしてラ・メトリーらが、それぞれど

のように互に相違し、ないしは、類似しているか、十八世紀フランス唯物論、あるいは機械論的唯物論として一括される思考方法の形成において、それぞれがどのような役割を果しているか、またどのように互に影響されたか、という問題は決して十分には討議されていなかったし、私の考えでは十分に意識されてもいないように思われるのである。つまり彼らの個性の問題である。彼らの個々についての研究がいままで全く欠けていた訳ではなく、ことに最近彼らについての個別研究は再び盛んになってきているのであるが、その点を考え合せても、このような問題が十分意識されることが、啓蒙思想の研究を進めていく上においても望まれる時期に達しているのではないかと思う。

さて、「人間機械論」の表題を真向からかかげて人間存在の霊性に挑戦し、数学・物理学・天文学の分野ではすでに確立された科学的方法を、今度は人間存在自体に適用しようとした医師ラ・メトリーは、十八世紀唯物論者の中でも異端のものとみなされている。このさい、彼の発言がいかに衝撃的であったかは、当時、キリスト教会の精神的支配から完全には自由ではなかった思想界が、人間存在の本質をその霊性においていたことを考えれば十分であろう。ラ・メトリーは社会を唯物論的に解釈しうるように、その基礎工作としてまず人間を唯物論的に解釈した。ラ・メトリー自身はこの役割を意識しなかったけれども、彼がこの必要作業をしてくれたので他のものたち（ディドロやドルバック）は彼の作業を自分の前提とすることができた。非難や批判はすべてラ・メトリーにふりかかった。

「ラ・メトリーは十八世紀におけるフランス唯物論の身代り山羊であった。敵意をもって唯物論に接触するものは誰でも彼をその極端な代表者として攻撃した。そしてみずからの見解をもって唯物論に接近したものたちさえ、ラ・メトリーに一蹴を与えることによって、もっともひどい非難から身を守った。そして、こうするのがますます便利になったのは、ラ・メトリーはフランスの唯物論者の中の最極端者であったばかりでなく、時の順でも最初の者だったからである。」これはランゲ（Friedrich Ablert Lange）の言葉である。

ヴァルタニアンのこの研究は、遠慮深くラ・メトリーの思想史的位置づけを辞退しているが、なおかなりよく十八世紀唯物論における彼の特異な位置を浮き出させている。

※「人間機械論」杉捷夫訳　岩波文庫。

二

本書は次のように構成される。目次によって各章の主題は明らかであろう。

一、ラ・メトリーの伝記的スケッチ
二、人間機械論解説
三、ラ・メトリーの思想的発展
四、人間機械論の歴史的背景
五、ラ・メトリーの同時代人による批判的反響
六、一七四八年以降の人間機械論

そしてこの後に人間機械論の新版がのせられ、さらにラ・メトリーに関する文献目録が付されている。

さて、この著作を評するに当ってこれら各章の内容を逐次紹介することを避け、この書が持っている主張および問題点を三つクローズ・アップして、それを紹介・検討することによってこの書の性格を明らかにしてみることにする。

その第一は、著者ヴァルタニアンによるラ・メトリーの思想の理解に関してであり、第二にはラ・メトリーの思想史上での評価についてであり、第三にこの研究の方法的特色である。

まず第一の点からはじめよう。ラ・メトリーの唯物論は著者によってどのようなものとして把握されているだろうか。この点に関しては第二章の人間機械論の解説の中で主として論じられている。

大体、われわれはラ・メトリーの唯物論に関してある種の偏見をもっているようである。つまり、われわれは彼が、人間存在を物質的存在に〝還元〟したという風に考えやすい。だが著者によると、実際はそうではない。彼がしたことは、数学・物理学の分野でめざましく発展させられた科学的方法を、医学の分野において人間存在に適用しようと試みただけである。つまり、人間の精神現象を、霊魂として、神の世界に属するものとして扱うのではなく、科学的研究によって無限に接近しうる対象として捉えたのである。したがってラ・メトリーがしたことは、旧い形而上学に代って、機械論という新しい形而上学を置きかえることではなく、一つの仮説、心理学的な、あるいは精神医学的な仮説をたてることだったのである。彼は感受性（irritability）を生命の神秘の鍵として、精神現象は肉体的条件にもとづくものであるという仮説をたてたのである。それ以上でもそれ以下でもない。彼は霊の特異性を認めなかったがまた精神を物質に還元した訳でもなかった。人間は機械であるとしても人間の創りえぬ、自律的な機械なのである。精神と肉体との、真の内的関連は知ることができないだけでなく知る必要もないと考えた、と著者は述べている。（pp. 13—23）それがドグマティックな唯物論とされてしまったのはその追随者によってであり、著者の精神によって理解されれば、それは人間の科学としての心理学の合理的基礎を形成するものだった、という。（p. 39）

この著者の立論はかなり説得力をもつものである。つまり唯物論哲学者としてのラ・メトリーよりも、科学者、医師としてのラ・メトリーの中に彼の本質を見出そうとするのである。そして科学者としての彼の態度は、唯物論者としての彼の反宗教的闘争とは一応別のものであるばかりか、それに先立つものであるというのである。神が存在するか否かは、人間が機械であるか否かとは無関係である（p. 24）とする著者の考え方は、恐らくは著者自身の近代的な科学哲学のにおいがするが、事実「人間機械論」を読んだ限りにおいて著者の主張を否定する要因は見出すことができない。むしろ著

者の卓見というべきなのであろうか。次の言葉はわれわれをうなずかせるものがある。「ラ・メトリーにとって、人間機械論の医学的な意義は、その反宗教的な目的よりも重要な価値をもつものであったけれども、実際的な意味からいえば彼の学説のこれら二つの視点は不可分である。なぜなら、十八世紀における科学と宗教の一般的な闘争を考えれば、一方は必然的に他方をまきこんでしまうのである。その結果として人間機械論の著者は、宿命的かつ創造的に、すでに他の人々が数学や、物理学や、天文学においてやったように、医学を、巨大なそしてまばゆいばかりの啓蒙思想の舞台に登らせた最初の人となったのである。」(p. 94)

第二の点に移ろう。

ラ・メトリーは思想史上どのように評価されているのだろうか。すでにのべたように、著者は思想史上の位置づけを辞退しているが、なお第六章において、ラ・メトリーの後世に与えた影響が推察されている。ラ・メトリーの影響を過小評価したために、啓蒙思想は重要な点で歪んで理解されていると著者は主張している。なぜこのような過小評価が起ったのであろうか。それは彼の同時代人による攻撃によってである。攻撃は、単に宗教家や道徳家からばかり起ったのではなかった。すでに引用したランゲの言葉にもあるように、啓蒙哲学者からも起ったのである。だが——著者はいう——十八世紀の眼で十八世紀を判断してはならぬ。それは当時の因習・宗教的偏見・利害によって不当に歪められている。啓蒙哲学者たちがみな彼との関連を拒否するが、それは時代の影響である。正当に彼の影響を判断すべきである。その判断の方法として著者は二つの方法を提示する。一つはラ・メトリーの著作の年代表とその散布状態、他は後継者と目されるものの学説との類似を探ることである。

このようにして著者ヴァルタニアンは、ラ・メトリーが啓蒙思想に与えた影響の大きさを再確認しようとするばかりでなく、その影響の流れを現代に至るまで追跡してくるのである。著者の解釈に従えば、ラ・メトリーは過去の人ではない。その影響は今なお生きている。おそらくは、近代的な科学哲学の創始者として、著者はラ・メトリーを評価しようとしていると思われる。人間機械論はサイバネティックス(人工頭脳学)とともに再三現代の論点となっている、と著者はいっている。

この点に関して私は論評する資格をもたない。著者の主張にかなりの説得力があることを認めるのであるが、ただ、このような評価は現代の科学哲学の目によって逆にラ・メトリーをふりかえってみようとするものである、ということはいえよう。さらに社会科学の立場からいえば、このような思想史的位置づけには大きな問題が残されることを指摘せざるをえない。つまり、著者は、自然科学者・医師としてのラ・メトリーを評価する余り、唯物論者・啓蒙哲学者としての彼を軽視しすぎたのではないだろうか、ということである。つまり彼の機械論が、精神医学や心理学ばかりでなく、十八世紀フランスの唯物論的社会観や道徳哲学の形成に与えた影響が見失われるのではなかろうか。さらに、機械論が唯物論であるかぎり、弁証法的唯物論との対比ないしは対決が不可避となることを忘れてはなるまい。

第三の問題に移ろう。

この著書の方法的特質についてである。著者の方法は文献誌的である、とでもいえようか。たとえば第四章は人間機械論の時代背景を示す文献誌であり、第五章は人間機械論をめぐるヨーロッパ各国での反響・論争の文献誌であり、第六章は、その影響をうけたものの文献目録と、人間機械論の研究文献目録である。

われわれ思想史を研究するものにとっては、一つの思想の形成過程、それが後代にうけつがれ、発展していく過程を明らかにすることが大きな課題の一つになるのだが、それをどのように確証していくかは非常に困難な問題である。その点この著者は一つの接近方法をわれわれに例示してくれる。

このような方法は非常に豊富な思想史的知識を前提とするものである。たとえば著者はラ・メトリーに影響を与えたと思われる文献や、ラ・メトリーによって影響されたと思われる文献を豊富に指摘し、適切な引用をしている。だがここにもまた問題は残される。つまり、それによってわれわれは、少なくとも、機械論的な考えかたが決してラ・メトリーによって忽然と表されたものではないことは知りうるにしても、果して彼が、このような文献を本当に読んだか否か、またそれら著者の指摘する文献自体、当時の思想界の中でどれだけの評価を与えられていたかを正確に知ることはできない。推定することができるだけである。

結びを急げば、この著作は機械論的唯物論として一括される十八世紀フランス啓蒙哲学者の一人の、特異な個性を明らかにしてくれるに十分な書であるということができよう。巻末の文献目録は有益である。